



Title	古今通について
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1954, 10, p. 7-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68437
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古今通について

宇佐美喜三八

五井蘭洲の「古今通」は、古今和歌集の全巻（真名序を除く）

に註釈を施したもので、今日においても写本のままで伝はっている。「群書一覽」には二十巻十本として挙げられてをり、「近代名家著述目録」や「国書解題」などでは二十巻、「大日本歌書綜覧」では十巻と註記がある。現在わが大阪大学の附属図書館に蔵められてゐる懷徳堂図書の中の「古今通」は、全八巻より成つてゐて、それが七冊に綴ぢられてゐる。「古今通」は、冊数はともかくとして、本来八巻の書であると考へられる。「歌書綜覧」の解説から諸本に関する部分を引用すると、

宝曆四年竹里自写の附箋書入本八巻弥富破摩雄氏蔵す。景範の一子敦善の文化元年に写せるは全部四本とす。今松井簡治氏の蔵たり。井上頼因氏の蔵小林歌城の手校本は三冊なり。

とあつて、弥富氏蔵の竹里自写の附箋書入本八巻といふのが正しい巻数であらう。竹里は「古今通」に補註を加へた加藤景範の号で、その景範の子が写した松井本が四本であるといふのも、八巻を二巻づつ合冊したものと推定せられる。弥富本は現在何処にあ

るのか、筆者は未だその所在を尋ね得ない。松井本は静嘉堂の、井上本は無窮会の文庫に蔵められてゐるものと思はれる。懷徳堂本には奥書がなく、書写の年月も人も不明であるが、今これによつて「古今通」八巻の各巻に註釈せられてゐる古今集の巻次及び部類の名を示すと次の通りである。

巻一―假名序

巻二―巻一（春上）・巻二（春下）・巻三（夏）

巻三―巻四（秋上）・巻五（秋下）・巻六（冬）

巻四―巻七（賀）・巻八（離別）・巻九（羈旅）・巻十（物名）

巻五―巻十一（恋一）・巻十二（恋二）・巻十三（恋三）

巻六―巻十四（恋四）・巻十五（恋五）

巻七―巻十六（哀傷）・巻十七（雜上）・巻十八（雜下）

巻八―巻十九（雜体）・巻二十（大歌所御歌・其他）

懷徳堂本は前記の如く右の全八巻の内容が七冊に収められてゐるのであつて、後に製本し直したやうな形跡もなく、最初から七冊に綴ぢられたものと認められる。さうして「古今通」の巻数は「古今和歌集巻第一 通第二」、「古今和歌集巻第四 通第三」といふ風に、各巻の最初に當る古今集の巻次名を記した内題の下に

書かれてゐる。この記し方は、上野図書館本においても同様である。「群書一覽」其他に「古今通」を二十巻としてゐるのは、古今集が二十巻であるために、「古今通」の巻数をも古今集の巻数と同様に見なしたのであらう。「古今通」の最後の巻である巻八は古今集巻十九の註に始まり、内題の「古今和歌集巻第十九」の下には「通第八」と記されてゐるが、古今集巻二十の註は「通」の巻八の半ばから始まるので、内題の「古今和歌集巻第二十」の下には「通」の巻数が示されてゐない。さうした点からも古今集巻二十の註があるのは、「古今通」巻二十であると誤まられ易いのである。「歌書綜覽」の見出しに十巻と註してゐるのは、「群書一覽」に二十巻十本とあるのから考へると、十冊の意味にも解することができる。このやうな問題は諸本を調査すれば明らかになるのであるが、要するに、「古今通」の巻数は八巻であるとするのが正しいであらう。

「古今通」の成立年代は正確にはわからないやうである。然しその序文の中に、「伊勢物語を内外に分ちし時、此集を併せ考る事のありて」と見え、「勢語通」を書いた後に執筆したことが知られる。「勢語通」の成つたのは宝暦元年十二月であるから、「古今通」は大體宝暦二年以後に成立したものと認めてよい。また前記の「歌書綜覽」の記事によると、宝暦四年に加藤景範の写した本が存し、宝暦四年には成立してゐたことが明かである。これによつて見れば、蘭洲は「勢語通」を書いた後、宝暦二、三年頃に、「古今通」の筆をとつたのであつた。

「古今通」は加藤景範の手で補正が加へられて、世に弘まつたの

ではないかと思はれる。「歌書綜覽」の解説にも「後、五井氏の請により加藤景範の補正を加へたるもの」とあつて、現在諸所に伝はる「古今通」は、蘭洲の書いたままのものではなく、景範が刪補を加へた本ではなからうかと推測せられるのである。懷徳堂本には巻初め蘭洲の序に次いで景範の記した附言があり、その中で景範は蘭洲の生前の依頼によつて今この書に刪補を加へたといふ次第を述べてゐる。従つて懷徳堂本の蘭洲の註には景範の刪補がある訳で、補つた部分は「補」と記してあるが、刪つた箇所は記述がないから明確にはわからない。景範の記した凡例によると蘭洲の註がなく、補註のみ記されてゐるのは、景範が原註を刪つたものであることが知られるが、仮りに原註に部分的な削除があつても、それは今直ちに知り得ないのである。附言の終りには、「天明きのとのみとし季の冬」と見え、天明乙巳の年は天明五年にあたる。「歌書綜覽」にいふ弥宮本は、それよりも三十一年前の宝暦四年に竹里即ち景範の書写した本で、景範は宝暦四年には數へ年三十五歳、天明五年には六十六歳であつた。弥宮本の附箋の書入れはいつなされたものか不明であるにしても、それが懷徳堂本の補註と全然同じものであるとは想像することができないであらう。事實、懷徳堂本に見られる景範の補註を、同じ天明五年の附言がついてゐる上野図書館本の補註と対照してみても、両者の間には明かに相違する所のあることを認め得るのである。例へば仮名序の註釈に加へられた補註で、懷徳堂本には、

天地鬼神は、榮注、毛詩序に勳天地、感鬼神、莫過於詩、といへるを本拠として書るにやと云。力をもいれずして以下

の四事は、人事につきていひ出るなり。これが広まりて花紅葉をもよむなり。是を受けて下にかくてそ花をめでといへり。

(下略)

とある所が上野本では、

みるもの聞ものにつけてとは、心に思ふ事を見聞ものにそへもし、なすらへもしていひ出すなり。力をもいれすして以下の四事、人事につけて心を種としていひ出るなり。これが広まりて花紅葉をもよむなり。これをうけて下にかくてぞといへり。(下略)

となつてゐる。歌の註釈の補註についてみて、例へば春歌上の「袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」には、懷徳堂本では、

上句、夏をまだ此ほどのやうに思ふ意あり。時節の早くうつるを感ずるなり。

とあり、上野本には「時節」以下の語句がない。また同じく春歌上の「春きぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ」には、上野本では、

あらじは上の春来ぬといふをうけて、鳴ぬ限りは春の来りたるにあらじと思ふなり。

といふ蘭洲の記した註があつて、これに

かくいはずなげなる事をいひて、誠は鶯を待心の深きを詞に頭はさでせかせるなり。

といふ景範の補註が加へられてゐるが、懷徳堂本では、蘭洲の註は右の上野本に見える文に続いて、

鶯の声をきかぬ間は春を春とも得思はぬなり。鶯を待心のいとふかきなり。

といふ文が加はつてをり、景範の補註は記されてゐない。かうした相違は両本の間によく見られるのである。上野本も懷徳堂本と同様に奥書がなく、書写の年代は明らかでないが、上野本で補註の上欄に書入れてある文が、懷徳堂本では補註の本文に入つてゐる例があることから考へると、懷徳堂本は上野本よりも後に書かれたのではないかと思はれる。

右の両本の補註を比べても、景範の刪補は諸本の間で相違のあることが予想せられるのであつて、その調査は今後の一つの宿題となるであらう。今ここでは懷徳堂本によつて蘭洲の註釈を概観しようとするのであるが、懷徳堂本における蘭洲の註が、本来の姿をそのままに伝へてゐるとは断言し得ないものであることはいふまでもない。これは景範の刪補した本に就くかぎり、いづれの本に拠るにしても当然起るべき問題である。懷徳堂本は丁寧書き写された清書本で、景範刪補本の定本として懷徳堂に収められたものであるかも知れない。然し景範の自筆本ではないやうに思はれる。

二

蘭洲は宝曆十二年三月十七日、六十六歳で病歿した。前記の如く「古今通一は宝曆二、三年頃に成つたことが考へられるのであるから、彼の五十五、六歳のをりの著述である。同書の自序によると、古今集は「上つ方に御伝授まします書」で下さまの者が深

い意を明らかにすべきものではないが、その註釈の筆を執つたのは、「ひとつ子のむすめに残しはべる。あへて此集を注すとはならず」といふ主意から出たのであると述べられてゐる。加藤景範の附言にも、その成立の由来を記して「これをなべての歌人にしめさんとはあらず。自序にいへるむすめのためのすさびなれどをのづから伝へ見ん人もこそあれ」と見える。蘭洲の言葉には自序としての謙遜の意があるとしても、「古今通」の内容をみると啓蒙的な註釈であつて、蘭洲が自分の娘程度の読者を予想して筆を執つたといふことは認めなければならぬであらう。

蘭洲はやはり自序の中で、「万葉はからうたに比すれば毛詩の如し。今の世の歌のさまざまならず。古今集は唐詩のごとく文華質実を伝へていとめでたし」と考へて、古今集の註釈を試みたといふことを述べてゐる。古今集の歌を華実を具へた風体を持つものとして、これを作歌の準繩にしようとする思想は、当時歌を論ずる人たちが一般に抱いてゐた所であつた。

蘭洲とほぼ同時代の漢学者である太宰春台が「古今集の歌は正しく盛唐の詩なり」(独語)といつて、古今集の歌を彼の理想とした盛唐の詩に準らへてゐることは蘭洲と同様である。新古今風を理想としながら、荷田在満が「古今集の如く文質兼美なる体」(国歌八論)といつたのは、「古今通」の書かれた頃より十年ほど前で、万葉に心を寄せつゝあつた賀茂真淵が、「古今集は千歳歌の手本なるべし」(古風小言)といつたのは、「古今通」の成立年代に近い頃であつた。「古今通」よりも三、四年後に、本居宣長は新古今を歌の道の至極頂上であるとする立場から、新古今風の

歌を詠まうとすれば、新古今集そのものよりも、古今集の歌を学ぶべきであると説いて、「日本紀万葉は至て質朴なれば、反て拙く鄙く、みぐるしきことも多し。只古今集が花実兼備してすぐれてうるはしければ、専らこれを規矩準繩とすること也」(排蘆小船)とか、「和歌の道にきて、第一に古への風体をみ、よき歌のさまをまなぶに、此古今集を以て規矩とすること、未代迄かはることなし」(同)とか述べてゐる。大音中養父が和歌の復古を唱へて古今集に目標を求め(小倉百首批釈)、また「蓋し物みな極あり、古今集は、それ国詩の極か」(国歌八論斥非)といつたのも、それから間もない頃である。これらの諸家は久しい伝統をもつ堂上歌字に批判を加へ、自覚的な歌字思想の上に立つて、古今集の価値を再認したのであつた。「古今通」の書かれた宝暦の初め頃、歌壇には復古思想が澎湃として漲り、新時代的な和歌を詠まうとする機運は次第に熟しつつあつた。漢学や国学における復古主義の思潮に伴つて、二条家の歌学を乗り越え、新しい理念に生きようとする意欲から、自然に古今集を尙ぶ思想も現はれたものといふことができる。さうして加藤枝直が「歌作らむと思はば、ぬかづきて古今集を見るべきなり」(歌の姿古今を論らぶ詞)といつてゐるやうに、堂上歌字に一応訣別を告げた歌人たちは、古今集を文質兼備の輝かしい範例としたことが考へられるのである。

蘭洲は既に述べたやうに、古今集については「上つ方に御伝授まします書なれば、下さまの者の深きむねあきらむべきにあらねど」とも言つてゐて、堂上歌字を否定することなしに古今集をみ

てゐるものと思はれる。然し景範の附言の中には、蘭洲の言葉として次のやうに記されてゐる。

古の歌には古の事をしらるゝを、後の世の歌を見ては、其世をしるべくもあらず。さるは題詠をむねとし、制禁のしげくなりきけるゆへなめり。されば何の事にまれ、昔有し事の今なきを猶有とし、いまあれどなかりし昔のあとをかたくもるめれば、いかで其世のさまのしられむ。しか事のじちをうしなへるに、代々の名匠のかくなりきけるあとをのみまもり、ふるきにかへすをしへのなきは、うらみならずや。

蘭洲が右のやうな見解に基づいて、一人娘のためにではあるが、古今集の註釈を思ひ立つたといふことを、景範は伝へてゐるのである。これに従へば、蘭洲もやはり題詠や制禁を歌の本来的なものではないと考へ、歌は誠を詠むべきであつて、それは古今集の古へに復へることによつて成し遂げられるといふ、和歌に対する近世的な自覚は持つてゐたと見なければならぬであらう。上野図書館本の文には部分的に語句の相違があり、右の「しか事のじちをうしなへるに」といふ所が、「しか事の誠をうしなへるに」となつてゐる。「じちをうしなへる」後の世の人の歌を、古今集の歌の誠に復へさうとして「古今通」を著したものとすれば、蘭洲もまた時代的な復古思想の波に乗つて古今集の古へを顧みただであつた。ここにおいて「古今通」著作の動機には、誠を失つた後世の歌を「ふるきにかへすをしへ」のないのを歎き、この欠陥を補ふ一助にしようとする念願のあつたことも認められる。それは「古今通」の出現が、時代の動きと接触を持つ一つの契点とし

て理解せらるべき事実であらう。

古今集を註釈した書物は、蘭洲の時代においても、すでにその数は少くなかつた。それにも係らず、蘭洲は何故また古今集の註釈を試みなければならなかつたのであらうか。その問題についても蘭洲は序文の中で理由を述べてゐる。彼は「勢語通」を書く時に古今集を併せ考へることがあつて、定家の遺書、顯昭の註、「朱雅抄」、「余材抄」などを参照したのであつた。古今集は文華質実を伝へた集であるのに、堂上の伝授のことはいざ知らず、頭註は省略があり、榮註は意に満たず、契註は煩はしく、手頃な註釈書が見あたらない。因つて慥忌をわすれて、それらの説の優れてゐると思はれるものは抄出し、また自己の見解をも述べて、全巻に註釈を加へたといふのである。契沖の註釈を読んだ蘭洲の眼には中世の註釈は飽き足りないものであつたに相違ない。一方、契沖の註釈は古今集の歌の趣意を知らうとする初学者には好適なものとはいひ難く、博引旁証の考察に学的な正確さはあつても、読者をして樹を見て林を忘れさせる結果に引き込む傾向の強いものである。「打聽」も「遠鏡」もまだ出てゐない時代であつて、蘭洲は自分の娘程度の者に与へるべき註釈書のないのを覚り、「古今通」の筆を執つたのであつた。蘭洲が古今集の啓蒙的な註釈を新しく書いたことは、決して屋上更に屋を架するものではなかつたのである。この事実もまた、「古今通」の著作が時代と接触してゐる一つの点に数へることができらうであらう。

漢学者にして和歌を嗜んだ蘭洲は、古今集が「唐詩のごとく文華質実を伝へていとめでたし」といふことを、実感として体認し

てみたものと思はれる。彼が「古今通」を書いたのは、古今集が勅撰和歌集の権輿であるためとか、堂上において尊重せられる大典であるためとかといふやうな、外在的な理由を主にしたものはなかつたのである。そのことは以上によつても察知することができる。

三

「歌書綜覽」には「古今通」の内容を解説して、「古説に由らず、自家の漢学的思想を以て古今集全部を註せるもの」と述べてゐる。然し懷徳堂本の内容についてみると、この解説は當つてゐると思はれない。蘭洲の註釈の中には顯注（顯昭註）、榮注（榮雅抄）、契注（余材抄）などと記して、先人の説が頻繁に引用せられてをり、引用せられた先人の説は、序文にも「其説のまされると覚るを抄出し」とある如く、蘭洲の肯定したものが挙げられてゐるのである。また蘭洲の註釈において、漢学思想は著しいものとはなつてをらず、強ひて詮索しても見当らない程である。景範の刪補が加はる前の「古今通」の註には、漢学思想が著しく見られたかどうか、今直ちにこれを知ることができないにしても、懷徳堂本の註釈から推して考へると、蘭洲の註が最初は漢学的思想をもつて古今集を解したものであったと見なすことはできないのである。

蘭洲が註釈に用ひた古今集は貞応本系統の流布本であるが、貞応本系統の本の中にも、春歌上の「春日野のとぶひの野守」の歌と、「みやまには松の雪たに」の歌とが、順序が變つてゐる本が

ある。正保四年の刊本を始め江戸時代の註釈書では、「かすが野の」の歌の次に「みやまには」の歌があるのが普通のやうで、「古今通」もその系統の本によつてゐる。所が貞応本の写本の中には「みやまには」が前にあり、「春日野の」がその次になつてゐるものがある。この系統の本によつてゐる。「両度開書」や「榮雅抄」などはこの系統の本を用ひてゐる。顯昭の註は別として、蘭洲が参照した註釈書によつて歌を掲げたとすれば、「榮雅抄」によらず、「余材抄」によつたものと見なければならぬであらう。

蘭洲の註釈は元來啓蒙的な意図をもつて書かれたものであり、簡単な記述のものが多く、そこに蘭洲の新見とも稱すべきものが皆無ではないにせよ、古今集の註釈史上で不朽の卓見とすべきやうな説は、求めるのが無理ではないかと思はれる。今ここにその註釈の態度について概観することにしたが、その前に仮名序の註釈の中に見られる所謂和歌の六義に対する解釈について少し触れておきたい。漢学者の考へた和歌の六義の解釈として、蘭洲の説は一応顧みておく必要があらうと思ふのである。仮名序にいふ和歌の六義は、そへ歌・かぞへ歌・なすらへ歌・たとへ歌・たご歌・いはひ歌であつて、これらを真名序に記す名称とも対照して、それぞれ詩の六義の風・賦・比・興・雅・頌に倣つたものであると解することは、古くから説かれてゐる所である。然し蘭洲は、貫之は必ずしも詩の六義によつて和歌の六種を樹てたのではないと述べ、真名序に記された六義を見て、仮名序の歌の六種を詩の六義に配当しようとする従来の註は、深い考へを缺いたものであるといつて、その理由を次のごとく説明してゐる。

詩の風は十五国の風の詩にて、其詩の内に賦比興の三あり。

そへ歌ごとき詩ばかりにあらず。其余これに類せり。むくさと六義と別の事なれば、牽合すべからず。其内に賦比興の三は歌にもあり。風雅頌の三はかなはず。凡こと毎に唐に引あはせんとするは、見識なき人のしわざなるべし。をのづから合ふことはあふとし、あはぬはあはぬにて義をとるべし。

詩の六義は「詩経」の大序に見えてゐるが、鄭箋でも集伝でも風・雅・頌を三経となし、賦・比・興を三緯としてをり、風・雅・頌は詩の性質から見た分類で、賦・比・興は詩を修辭学的に見た場合の分類であるとするのが普通のやうである。従つて蘭洲の説くやうに、賦・比・興は和歌にもあるが、風・雅・頌を和歌にあてはめることはできないといふ見方も成立つのである。さうした考へ方に基づいて、蘭洲は和歌の六義を例歌に即しながら解釈してゐる。今はそれらを一々紹介することは省略する。和歌の六義を詩の六義と離して考察しようとするのは、彼が漢学者として詩の六義を理解してゐる所にも関聯する問題であらう。そのために彼の和歌の六義に対する解釈は、結果的に見れば、かへつて漢学思想から遠いものとなつてゐるといふことができるのである。

さて、歌に加へられた註釈を通覧すると、蘭洲は一首の趣意を簡明に伝へることを目標としてゐるやうに思はれる。註釈の様式は歌によつて相異があるが、巻頭の歌について例示すると、

ふるどしに春立ける日よめる

いつにてもあれ、立春の節を四時の始とする故、是は冬よめど春の部にのせたり。

在原元方（割註省略）

年の内に春は来にけり一年をこそとやいはん今年とやいはんこそといひ、ことしといふは、二年にていふ詞なり。然るに一年の内にこそことしある故、何れをとりていはんとなり。

といふ風に簡単なものである。この例のやうに歌の趣意の解説のみに止つた註はかなりあつて、例へば「ことしより春しりそむる桜花散るといふことはならはざらなむ」（春上）の註釈は、

此宿の庭にて、初めて花咲て春をしりたる様にて、いまだ散ことをしらぬ花なり。世間の花にならはずして、長くさかりのまゝにあれかしとなり。

とあり、「鳴きわたる雁の涙や落ちつらむもの思ふ宿の萩のうへの露」（秋上）の註釈は、

我物思の涙に、鳴雁もさこそと思ひやり、さて萩の露をやがて雁の涙とおもひなすなり。

とある。もちろんこの種の註も長短さまざまで、一行で終つた短いものも見られる。次に歌の中の詞の意味を説明して、一首の趣意を述べた註も多い。「くるるとあくともかれぬものを梅の花いつの人まにうつろひぬらん」（春上）の註釈には、

くるは日の暮るなり。あくは夜の明るなり。めかれぬは目をはなたぬなり。離の字をかれとよむ。明ても暮れても目をはなたぬなり。かくあかず見をるに、いつわが見ぬ間ありてうつろひたるぞとなり。人まは人のみぬ間なり。

と記され、「月みればちとに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋に

はあらねど」(秋上)については、

上の句に干をいひ、下句に一をいふ、自然の対なり。ちよは千箇なり。千々にあらず。一つ二つはちみそちと云。つとちと通して數ふることばなり。我身ひとつの秋にあらねど、我身ひとつの秋のやうに覚ゆるとなり。

と註釈してある。以上の例には先人の説は引かれてゐないが、「雑抄」や「余材抄」などの説を、榮注、契注などと記して引用したものは極めて多く、その引用の後に愚案として自己の見解を述べるのが原則となつてゐるやうである。例へば「世の中にさらぬわかれのなくもがな千世もとなげく人の子のため」に(雑上)の註釈は、

契注、いせ物語には千世もといのるとあり。なげくは深くねがふ心なれば祈る心あり。愚案、世に此別れのおり来るをなげくなり。

とあつて、この愚案は一首の趣意を簡単に述べた例である。愚案のやゝ多く述べられたものを示すと、「手向にはつづりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさん」(巖旅)の註釈は、

契注、つづりの袖は袈裟なり。袈裟はきりたちて作れる物なれば、つづりといふなり。愚案、釈氏要覽に雑碎衣といへる小き布帛を集めてつづり縫故にいふなるべし。歌の心は、我は袈裟にてもきりてぬさにすべけれど、此紅葉の錦にあきたれる神なれば、受給はじとなり。

と記されてゐるのである。この種の註も引用文或は愚案の文に長短があつて様々であることは言ふまでもない。中には先人の説を

引用してゐるのみで、自説の記されていない場合もある。「山桜わが見にくれば春霞みねにもをにも立ちかくしつ」(春上)の註釈は、

契注、尾とは山のさきに下れる所をいふ。戦国策云、季歴葬、干楚山之尾、又常山之尾、注云尾猶未也。

とあつて、「余材抄」の註の最初の部分を引いたものである。しかも右の「戦国策」の漢文は「余材抄」に引用した原文を省略して掲げてゐる。「余材抄」ではその後、「我見にくれば時しもあれ霞の立かくしてみせずと、霞のあやくなるを恨むる心あり」といふ歌意の説明があるが、蘭洲の註には歌の趣意を説いてをらず、また景範の補註もない。これは書写の誤りで脱落したのではないらしく、上野本を見ても同様であり、またかうした例は他にいくつも見ることが出来る。「君しのお草にやつるる古郷は松むしの音ぞかなしかりける」(秋上)の註釈は、

契注、君しのお草とは、しのお草をいへり。榮注、やつるゝは弊字にてやぶるゝなり。

とあるのみである。「余材抄」の註が右に引用せられた「しのお草」の説明のみでないことはもちろんで、「榮雅抄」を見ても「やつるゝ」の説明だけではなく、「きみ忍ぶ草のみしげくおひて、あるゝ古郷は、松虫の鳴音ぞかなしきと也」といふ一首の大意が記されてゐる。蘭洲は一首の趣意は自明のこととして書かなかつたのであらうか。然しこれには景範の補註のある所を見ると、或は景範が削除を加へたのであらうか。序文の中で先人の説は採るべきものを抄出したと述べてゐる通り、引用した先人の説を批判

するやうな言葉は全くないといつてよい程見られない。「残りなく散るぞめでたき桜花ありてよの中はてのうければ」(春上)の註の中で、「めでたき」といふ語の意義に關し、

榮注に愛したきと有。愚案、是は見たき聞たきのたきにて、欲するなり。めでたきは然らず。うれたき、こちたきの類にて、意義なき字なり。めづべきの心なり。

といつて「榮雅抄」の説を訂正してゐるのは、極めて乏しい例であらう。「秋の野の草の袂か花すゝきはに出てまねく袖とみゆらむ」(秋上)の註釈は、

契注、袖はすべていひ、たもとは袖の下なり。袖と袂は同じ中に、こまかにいへば別なきにあらず。愚案、此歌にては別なし。

とあつて、これなどは歌に即して契沖の言を批判してゐるとも見られようが、やはり契沖の説明は肯定して、それを補ふ意味で自説を加へたものといふことができる。

右の例によつても知られるやうに、蘭洲の註を漢学思想をもつて歌を解したものだといふのは至当でない。蘭洲は漢学者であるが古今集の歌については穩健な考へを有してゐたといふべきであらう。また先人の説を参照してゐても、決して彼自身の見識がなかつたとは言へないのである。仮名序の古註を除くべきものとしてゐるのはともかく、歌の左註についても彼は疑問を抱いて意見を述べてゐる。最初に出てくる左註は、春歌上の「心ざしふかくそめてし」に附いてゐる「ある人のいはく、さきのおほいまうちぎみの歌なり」であるが、これに対して「序の古注書る人の筆なら

んもはかりがたし」と疑惑の眼を向け、春歌下の「かはづなく井での山ぶき」の歌に附けられた「この歌はある人のいはく、橘の清友が歌なり」といふ左註については、「此注は後人の書くはへたるにもあるべし」といつてゐる。橘清友は檀林皇后父、仁明天皇外祖父に當り、贈太政大臣正一位の人である。契沖はかかる人を下官の人のごとく、「橘の清友が歌」といふべきであらうかと疑ひながら、その左註は後人の作であらうとまでは言つてゐないのである。蘭洲は契沖の説を引いて後人の書入れであらうと述べたのであつた。「橘の清友が歌なり」といふ書き方から、真淵も「古今集左注論」・「統万葉論」・「古今和歌集打聴」などで、この左註が後人の作であることを論じてゐる。(拙著「和歌史に關する研究」二四七頁参照)。古今集の左註をすべて後人の偽作とする考へ方は、荷田学派の通念であつたやうに思はれ、真淵も左註は信すべからざるものとしたのであつて、「橘の清友が歌なり」も、真淵にとつてはそのことを論証するための資料となつてゐるのである。蘭洲がこの左註を後人の作であらうとしたのは、契沖の抱いた疑惑を補つた形においてであるが、さうした所にも蘭洲の見識といふべきものが窺はれるのではないかと考へる。

蘭洲の註釈は歌の意味を客觀的に明らかにすることを目的として、歌を評價する言葉はそこに述べられてゐないといふことができる。然し「昨日といひ今日と暮してあすか河ながれて早き月なりけり」(冬歌)の註釈では、

榮注、一年をきのふけふあすのくるにいひなす事妙なり。愚案、此歌心至り詞至り体至る。誠に絶唱とすべし、かく早く

過る月日をさも思はで、いたづらに一年の暮しを歎ずるなり。といつて、絶讃の辞を述べてゐる。老年の蘭洲の心境に実感として訴へる詠歎があつて、このやうに共鳴したものに相違ない。この註釈に見られる批評は、蘭洲の和歌に関する文学觀を覗く窓口ともなるであらうが、かうした種類の評言は、「古今通」の中に殆んど見出すことができないのである。

四

蘭洲が「古今通」を著した動機についてはさきに考察した所であるが、蘭洲の註釈はそれ以前の古今集の註釈に比べて、具体的に如何なる特色を有するのであらうか。古今集の註釈書は汗牛充棟も管ならぬ有様で、その中江戸時代に入って蘭洲の時代までに刊行せられた重なるものは、「頭註密勘」(明曆三年刊、元祿十五年再刊)、「古今和歌集兩度聞書」(寛永十五年刊、万治二年再刊)、「古今榮雅抄」(延宝二年刊)、「八代集抄」(天和二年刊)の中の古今集の抄などである。蘭洲は契沖の「古今余材抄」をも参照してゐるが、「余材抄」は江戸時代には刊行せられなかつた。右の刊本の中、季吟の「八代集抄」を除いた三書はいづれも中世において書かれた註釈書であつて、季吟の註釈も近世になつて書かれたものであるといへ、中世の註釈の集註ともいふべき傾向をもつものである。契沖の「余材抄」がそれらとは趣を異にした近世的な註釈の最初のものであることは、詳しく説明する必要はないと考へる。蘭洲はその新しい契沖の註釈を見てゐるのであつて、中世の註釈書である「榮雅抄」については、「古今通」の序の中で

「榮注は心ゆかず」といつてゐるのである。啓蒙的な註釈書であるにしても「古今通」が契沖以後の註釈書としての特性を有すべきものであることは、おほよそ推察することができるであらう。今ここに、古今集の歌一首を取りあげ、右に挙げた註釈書においてその歌がどのやうに註釈せられてゐるかを概略記し、「古今通」におけるその歌の註釈を掲げて、蘭洲の註の特色を端的に見ることにしたい。

古今集の春歌上にある、題しらず詠人しらずの歌、

ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆ
く

といふ一首は、「ももちどり」が古今伝授の三鳥の一つに扱はれて知られた歌である。「頭註密勘」を見ると、頭註では「ももちどりはうぐひすをいふ」といふ説を一応掲げた後、「ももちどりは百千鳥で諸の鳥の意であると説いて、万葉の「我が宿のえのみもちはむ百千鳥」の歌を挙げて例証し、古今にも後拾遺にも鶯とももちどりと離れて出てゐることを指摘して、両者が別の鳥であることは「うたがひあるべからず」と述べ、なほ「月令の反舌百舌などはもすといふ。又百鳥を囀鳥によせて鶯敷と申つべけれど、それはとかく申べし。不定也」といつて結んでゐる。然し定家の密勘では、「非鶯とも難一決、又不可限鶯。百鳥も云一つ先鶯敷。百花も柳桜をのぞくべからず」(刊本に拠る。写本一本には「百鳥も」以下の所が「百鳥も云々先鶯敷」とある)といつてをり、「ももちどり」が鶯であるか否かについては曖昧な態度がみられる。次に「古今和歌集兩度聞書」の註釈には、「上は時鳥

なくや五月のたぐひ也。春は物毎にといふうちによるづの事こもれるなるべし。あらたまるは常住の心也。かくみな立かへりあらたまれども、われぞふり行とうち歎く義也。もゝ千鳥の事、御抄にくはしく見ゆ」とあって、歌の趣意の説明が記され、「ももちどり」の事は「御抄」の説明にまかせてある。「御抄」といふのは「八雲御抄」で、同書巻三枝葉部の鳥部に掲げられた「鶯」の条の説明では、「ももちどり」が鶯のこととして挙げられ、「是は不限り鶯。是春百千鳥之囀也。但鶯に詠有例」と註はあるが、前記の万葉の歌の「ももちどり」も鶯のことに解せられてゐるのである。「古今采雅抄」では、先づ「百千鳥さえづる春は、ものごとにあらたまれども、我身ぞふりゆく也。もゝといふに、ふりゆくにあしらひたる面白し」といった後、「ももちどり」について頭註によつたと思はれる説明を記し、「只鶯をも百千鳥といひ、多くの鳥をも百千鳥といふと、心えてありなん」と妥協的な説を立てて、定家の説を密勸によつて附記してゐる。さうして、最後に例の万葉の歌を第二句を「榎の実むれはむ」として挙げ、「この歌、鶯は榎の実はむれはむまじければ、おほくの鳥ときこゆ」といって、万葉の歌の場合は多くの鳥の意であると説いてゐるのである。「八代集抄」ではただ「ももちどりさへづる」といふ語句を掲げて、「古今三鳥の一なり」と説明してゐるだけで、他には何らの註もない。「古今余材抄」になると、多くの文献によつて「ももちどり」の意につき極めて長文の考察が記され、結局「春はよろづの鳥のさへづりかはせば、ももちどりさへづる春とはいへる歎」と述べてはゐるが、なほ鶯に解しても差支へのない

例をも挙げてゐて、「ももちどり」がよろづの鳥の意であるとは断定してゐないのである。以上によつて明かな如く、古今集の「ももちどり」の意については、定家以来鶯をいふといふ説が受け継がれて、契沖においてさへその考へは完全に除かれず、いまだ名残を留めてゐる。それらの註釈の後を承けて、「古今通」では次のごとく見える。

采注、万葉に、わが宿の榎の実むれはむもゝち鳥千鳥はくれど君はきまます。鶯といふ説あれど、鶯は榎の実はむれはむまじければ、多くの鳥と聞ゆ。しかれば百千の鳥なり。春は物ごとに改まりて新なれど、我身は春をへてふり行く老をなげくなり。

このやうに簡単な註ではあるが、「采雅抄」の註を抄記した後、「ももちどり」は百千の鳥であると断じてゐる。今日古今集を解く学者も、やはり百千の鳥の意としてゐることは勿論である。その上「ももちどり」の歌を人に理解させるのに大切なことは、「ももちどり」の意の穿鑿ではなく、春ごとに新しく改まる自然現象と、春ごとに老いてゆく人間の自分とを対比して生ずる歎老のこころの指摘でなければならぬ。蘭洲の註釈は簡潔であつても入門者のためにそのことについて述べてゐる。さうしてこれには景範の補註もついてゐないのである。

「古今通」の註釈が宝暦の初年に漢学者の手になつた啓蒙的なものでありながら、中世的な解釈を超越して、歌意を正當に伝へることに努めたものであることは、この一例によつても察することができると思はれる。もとよりそこには右の例にも見られる如く

先人の註に啓発せられた所も決して少いとはいひ得ない。殊に契沖の研究から恩恵を被った点が極めて甚大な事実は一見明かである。蘭洲が浪華に在って「古今通」の筆を執つてゐた頃、京では遊学に出て間もない青年の宣長が、契沖の著書に接して感激に燃え、新しい歌学に眼を開きつつあった。蘭洲の見識はこれを認めなければならぬのであるが、「古今通」にも契沖の学問的精神は流れこんでゐるといふべきであらう。

真淵の「打聴」や宣長の「遠鏡」が成立したのは「古今通」よりも後であつて、「打聴」の書物としての成立については大阪にも関係があるが、真淵は大阪の学者ではない。「古今通」の後に近世大阪の和学者によつて書かれた古今集の註釈書には、尾崎雅嘉の「古今和歌集ひなことば」があり、寛政八年正月に刊行せられた。その註釈は古今集に遠鏡式の口訳を施したもので、例へば前記の「ももちどり」の歌には、「いろ／＼の鳥が、おもしろうさえつる春は、何もかもさっぱりとあたらしうなるけれども、それが身ばかりは、ふるうなつて行ごとじや」と註がある。また題や左註にも所々口訳があつて、「雪の木にふりかかれるをよめる」といふ題には、「雪がうへ木にすこしふりかかつて有をよんだ」と訳がついてゐる。このやうに「ひなことば」は語釈のない口訳古今集で、「古今通」が啓蒙的ではありながら、なほ学究的な註釈から成つてゐるのとは趣を異にするのである。「古今通」の註釈の特質はこの点からも考へなければならぬであらう。

最初述べたやうにこの小稿は懷徳堂本の「古今通」によつて論述したものであり、同書には加藤景範の刪補が加へられてゐて

補註は明記してあるが刪つた箇所は不明の所がある。右に引いた「古今通」の註釈の中にも景範が部分的に刪つた後のものがないとは今俄かに断言し得ないとしても、然しそのやうな景範の削除が判明したところで、小稿に考察した所が根本的に覆る虞れはないであらうと信ずるのである。なほ景範の補註については、後日機会を得てその概略を述べたいと考へてゐる。

附記、本稿に記した上野図書館本の本文に関することは、すべて田中裕・八木毅両氏の撮影に係る写真に拠つたもので、両氏の御努力に対してここに深く感謝する次第である。

(科学研究費による研究の一部)

— 大阪大学教授 —